

「米之台」に伝わる祝い唄

齋 藤 孝*

Festive Song Handed Down in the “Kome no Day”

Takashi Sarro

「米之台」というのは横須賀市小矢部町、万年山大松寺を中心とした一小台地であって、衣笠公園を西に、城山と呼ぶ衣笠城の小出城を北にした小高い丘の字名である。台地の上で別に米が穫れる訳でもないのにそういう地名がついたのは昔近郊でとれる米の検査場になつていたからであって、その頃検査役である大津のお陣屋の役人が出張する時、近所の百姓が交替で籠かきにかり出されたものだそうで、道の悪い山道にかかるとわざと籠をゆすっては担ぐ百姓を困らせ、煙草銭をせびつた悪徳者もあったとか、その頃の伝え話が残っている。

したがって昔からの伝説や土俗語りも数多い中に、今は知る人も少ない祝い唄がある。太平洋戦中までは「焼米搗き唄」や「木遣り音頭」の数多くを伝えた老人もあったが今はすでにきく由もなく、僅かに正月の餅搗き唄とか婚礼の席などに唄って聞かされた祝い唄を往時の名残りに記録にとどめ昔を偲ぶよすがとする次第である。

これらの唄は手拍子、杵拍子に合せて唄った祝い唄だけのこともあるが、つづいて「ほめ詞」を一気呵成に調子よく唱え、最後に御一同様おめでとうございますと結ぶ時は、めでたい座敷の空気が一段と華やぎ引立ったものであった。

◇祝 い 唄

^{アラタクニ}新玉のナーヨーエ新玉のナオサエ年の始めに

^{カド}門には門松^{バヤシ}門囃ナーエ

門松のナーヨーエ門松のナオサエ一の小枝に

くじゃくの小鳥がとまるソヤナーエ

羽がいに^{コゼニ}ャナーヨーエ、羽がいに^{コゼニ}ャナオサエ小銭をくみそや口には^{コガネ}黄金をくわえソヤナーエ

その鳥がナーヨーエその鳥がまたもとまれば

^{マツダ}末代長者で暮すとかナーエ

◇ほめ詞

東西ヤ〜ホメ申そう〜

ほめる作法は知らねどもチチラチクトンばかりほめ申しましょう。

まず正月は二十八日のことにしますれば、とも子朋輩打連れて武山不動御参拝、さい錢三文バラリと打ち投げて鰐口カーンと打ち鳴らし、北をはるかに眺むれば、田戸山崎の漁船が猿島沖で手繰り引き、大津の浜の庶人ども帆かけて走る走水、鴨居腰越鳥ヶ崎、浦賀の港はよい港、入り船出船繫り船、かかつた船のともづなを、エンヤ八幡久比里久里浜野比長沢、津久井の浜の浜千鳥浜の小松の二の枝に、ちりかき集め巢を造り、十二の卵産みそろえ、夫婦そろつてたつときは、十二の卵に目を明かす。アーアめでたいナめでたいナ目出度い下で七福神のお酒もり、

* 横須賀市立山崎小学校

金の杯黄金の銚水、飲めや大黒唄えやゑびす。唄いよこぶ福の神とうやまつてそうろう(候)。また新築お祝いのときには次のようなほめ詞も出される。

「ほめ申そう〜 何をもつてかほめ申しましょう。ここのお家をほめ申しましょう。ここのお家はめでたいお家、柱白銀桁黄金、屋根は小判のこけら葺き、東窓には錢すだれ、錢の孔から朝日射す、朝日、長者の暮しとホほうやまつて候。

時には祝いの座がさざめいてきた頃次のようなおどけたほめ詞も出ることがあった。

ホメ申そう〜ほめる作法は知らねどもチチラチクトンばかりほめ申しましょう。

鎌倉のケケラ建長寺の長廊下に種なし瓜を蒔いたらば、イヤ成つたこと成つたこと、瓜の木にはなすびが成り茄子の蔓には瓜が成り、この瓜茄子畑へ、昨夜生れた奴が、スツトンカラリととびこんで、モリモリやろうとするところを、盲が見つけたんぼが聞きつけいざりが追かけ手んぼがつかまえて、燈心でしばりからげて線香で打たたき、これをお嬢様に申上げようか旦那様に言いつけようかと迷っている中に、海の水に火がついて消そう消そうであんまりあわて、くらの骨を肩の先から爪の先まで突き通し、白でほつてもぬけないが豆腐でほつても抜け切らず、こんにやくでほつてもとり切れない。これにつける薬は何が良かろうと、赤亀の甲にきいたらば、天の亀の子地の雷の骨、木の上の海老ジャコ田の中の人蔘午芎、畑でとれた蛤を、水で黒焼きにし火でといてあさつてつければおとといの頃スツペラボウと抜け物語りとほめ申して候。

なかなかひょうきんな戯れ詞もあったものであるがその酒席をとりもつ「おとりもちさん」といわれる人がお酒をすすめるにもまた次のようなものがあった。

ホーホケキヨとやら大阪とやら

ネナイトコナイネンネコネ

ねんねの子守りはどこのもの、それは山中在郷もの、鳥も通わぬ山中で、ホンヤホロローとウイツウイツのかぐら舞い。

それでは錢がとれませぬ。

イヤわしらはその日のヒヨドリで、チイとハアトが五六羽八羽六十四、四十から長い浮世を眺むれば、人の情のニワトリがあまりメンメンメさるナ、人は心、人はただ心よしともコチャンラサギのウドリどの、アスはソメ色ベンローのせいの高さの七八尺、クジャクジャク(お酌)でお干しなさい。

節拍子手ぶりおかしくおどけたさまが目に見えようである。その外花嫁花婿をたたえた祝い唄、替え唄など数々のものが伝える者もなく消え去ったのは誠に淋しく惜しまれる次第である。